

令和 4 年 5 月 31 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(A)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H00919

研究課題名（和文）JOPTの拡充と普及：汎用性と実用性に富む日本語口頭能力試験の実現

研究課題名（英文）Expansion and dissemination of JOPT: Realization of a versatile and practical Japanese oral proficiency test

研究代表者

六川 雅彦（Mutsukawa, Masahiko）

南山大学・外国語教育センター・教授

研究者番号：40434609

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 33,200,000円

研究成果の概要（和文）：実用性・汎用性に富む日本語口頭能力テストの開発を目指してスタートしたプロジェクトであったが、JOPT（Japanese Oral Proficiency Test）と称する対面式テストのモデルを開発し、完成させることができた。また、テスト実施、テスト実施のためのマニュアルも作成した。今後の普及活動のためのウェブサイト（<https://jopt-team.org/>）も作成し、公開している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語教育における口頭能力測定の重要性に対する認識はあるものの、その研究・開発は遅れており、日本語教育もその例外ではない。このような状況の下、JOPTを完成、公開することにより、口頭能力テストの一つのモデルを示すことができた。これにより、今後日本語口頭能力テストに関する議論が活発になることが期待される。また、本科研プロジェクトメンバーも、JOPTの開発・普及活動を続けながら、JOPT開発の知見を活かし、今後も日本語教育の分野、特に日本語口頭能力測定に関する分野の発展に貢献できると考えている。

研究成果の概要（英文）：The project started with the aim of developing a practical and versatile Japanese oral proficiency test. And we were able to develop a model for a face-to-face test. The name of the test we developed is JOPT (Japanese Oral Proficiency Test). A manual for conducting the test and training testers was also developed. A website (<https://jopt-team.org/>) has also been created and published for future dissemination activities.

研究分野：日本語教育

キーワード：口頭能力テスト 日本語 アカデミック領域 ビジネス領域 コミュニティ領域 介護領域

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

外国語教育における口頭能力測定の重要性に対する認識はあるものの、その研究、開発は非常に遅れており、日本語教育もその例外ではなかった。1984年に始まった日本語能力試験においても、当初からその重要性は認識されていたが、口頭面の問題作成には着手されず、また、2010年の大改訂に際しても口頭能力の測定は先送りにされた。さらに90年代後半から国際交流基金を中心に多大な努力が払われ、会話テストの試行版まで作られたが、2008年に突如そのプロジェクトは停止してしまった。その間、「欧州共通言語参照枠組み」(CEFR)や「JF日本語スタンダード」も発表されたが、口頭能力の測定については、米国外国語教育協会(ACTFL)の開発によるOPI(Oral Proficiency Interview)のみが日本語教育においても、唯一使用に耐えるものであった。

しかし、OPIはそもそも米国の高等教育機関での使用を前提としており、またOPIテストの養成にも多大な時間を要し、更に被験者一人のテストに30分かかるため、実用性に乏しく、日本語能力試験のような大規模テストには向かない。更に、多様な層からなる日本語学習者、とりわけ、日本における長期定住外国人(地域生活者)や国際化した産業界の需要にも応えられない。CEFRについても、測定・評価を射程においた開発は行われておらず、外国語教育会のニーズに応えられるものとは言えない。

このような認識の下、本科研プロジェクトメンバーは2013年度より科研費基盤研究(A)(課題番号25244023「日本語会話能力テストの研究と開発：国内外の教育環境及び多文化地域社会を対象に」として、JOPT(Japanese Oral Proficiency Test)と称する対面式テストのモデル開発を始めたが、完成させ、公開するまでには至らなかった。そこで、前科研プロジェクトの成果を拡充、発展させ、より広範囲に実施が可能な、実用性のある口頭能力テストを完成させ、公開することを目的に、本科研プロジェクトはスタートした。

2. 研究の目的

前科研プロジェクトの継続プロジェクトとして、遅れている日本語の口頭能力測定に関する研究、その測定のためのテスト開発を進めるため、以下の目的を設定した。

- (1) 本研究プロジェクト終了時に一般公開するために、前科研プロジェクトで完成させたアカデミック、ビジネス、コミュニティの各領域のテスト問題を拡充する。
- (2) 前科研プロジェクト時に作成したJOPT実施のためのAndroid OS上で作動するアプリを改良し、完成させる。
- (3) 前科研プロジェクト時に作成したJOPTのデータの保存・管理、評定・評価をオンラインシステム上で行うためのシステムの改良を行う。
- (4) テスター、評定者養成のためのワークショップを開催するために必要なマニュアルを完成させる。
- (5) 前科研プロジェクト終了時ではJOPTは3領域のテストであったが、他領域の追加を検討する。

3. 研究の方法

本科研プロジェクトメンバーがそれぞれの専門性を生かし、かつ共同作業が可能になるよう、次の研究班を設け、全員が有機的に活動できるようにした。

- (1) 統括班
- (2) 各領域班、
- (3) 評定・評価班
- (4) 分析班
- (5) マニュアル班
- (6) ワークショップ班
- (7) システム班

この組織体系に基づき、新型コロナウイルス流行前は1-2か月に1度程度対面で、流行後はより頻繁にオンラインで全体会議を行った。更にコロナ前までは毎年夏期休暇に3日間程度の合宿、春休みには公開シンポジウムを開催し、パネルディスカッション、本科研の進捗報告、基調講演者を交えての研究会議等を催した。また、国内外における学会での研究発表も行い、多角的

視点に立った口頭能力テストの開発に取り組むことにした。また、各種試行については、本科研プロジェクトメンバーだけでなく、それぞれのメンバーが直接的、間接的に関わりのある国内の日本語教育機関の協力も得て実施した。

4. 研究成果

本科研プロジェクトは前科研プロジェクトの継続プロジェクトであり、研究課題を「明らかにする」というよりも、日本語の口頭能力測定のためのテスト開発を主な目的としたプロジェクトであった。テスト開発のためには、それに関わる理論的基盤構築とテストモデルの作成、試行テストの実施とその結果の分析、能力評価のためのガイドラインの作成とテスト養成のためのマニュアル作成等多くの作業が必要である。従って、本科研プロジェクトの目的の性質上、論文執筆には十分な時間を確保することができなかつたが、テストモデル、マニュアルを完成させることができた。今後は、学会発表・論文執筆と共に、テストの改善、拡充の作業を続けながらの普及活動が中心になるが、そのためのウェブサイト (<https://jopt-team.org/>) も作成し、完成した JOPT を公開している。

以下、「2. 研究の目的」で述べた 5 つの目的に沿って研究結果を紹介する。

- (1) 本研究プロジェクト終了時に一般公開するために、前科研プロジェクトで完成させたアカデミック、ビジネス、コミュニティの各領域のテスト問題を拡充する。
前科研プロジェクト終了時からテスト形式も少し変更し、各領域のテスト問題を拡充した上で、普及のためのウェブサイトを作り公開した。
- (2) 前科研プロジェクト時に作成した JOPT 実施のための Android OS 上で作動するアプリを改良し、完成させる。
Android OS 上で作動するアプリの開発は中止した。Android OS の特性上、動作環境を維持し続けるためには人的・金銭的コストがかかりすぎることが主な理由である。これに代わり、コロナ禍の世界で急速に普及した ZOOM 等のシステムを利用して実施できるように変更した。
- (3) 前科研プロジェクト時に作成した JOPT のデータの保存・管理、評定・評価をオンラインシステム上で行うためのシステムの改良を行う。
前科研プロジェクト終了時のシステムではデータを自動的収集、保存する形式であったが、個人情報保護に配慮し、このシステムを継続利用することを中止した。そして、これに代わるデータの保存・管理、評定・評価の方法をマニュアル化した。
- (4) テスター、評定者養成のためのワークショップを開催するために必要なマニュアルを完成させる。
テスター、評定者養成に必要なマニュアルを完成させた。
- (5) 前科研プロジェクト終了時では JOPT は 3 領域のテストであったが、他領域の追加を検討する。
アカデミック、ビジネス、コミュニティの 3 領域に加え、新たに社会的なニーズが大きい 4 つ目の介護領域を完成させ公開した。

他の科研プロジェクトも同じような状況だったと推察されるが、本科研プロジェクトも新型コロナウイルスに翻弄され、大幅な計画の変更が必要となった。2020 年に入り、新型コロナウイルスの影響が出てきたが、2019 年度は何とか計画通り研究を進めることができた。しかし、2020 年度に入って新型コロナウイルスの感染状況が悪化したため、当初の計画通りの研究が行えないと判断し、2021 年度へ繰越した。2021 年度になっても状況は好転せず、当初の計画通りに研究を行うことはできなかつたが、ほぼ毎月全員でオンラインミーティングを行い、その都度計画を修正しつつ研究を進め、状況が良くない中ではあったが年度内に何とかデータを取ることでもでき、年度末までに完成させて完成シンポジウムを開催することができた。完成シンポジウムも当初の予定とは異なりオンラインでの開催となったが、結果的にこれにより世界中から予想以上の参加者を集めることが可能となり、最終的には 600 名以上の参加申し込みがあった。また、前科研プロジェクト開始当初から「対面」にこだわりテストを開発してきたが、コロナ禍の世界で急速に普及した ZOOM 等のシステムを利用し、「遠隔での対面」で実施できるテストとして完成させることができた。

日本語分野においては実用性・汎用性に富む口頭能力測定テストが存在しないというところからスタートしたプロジェクトであったが、JOPT を完成、公開することにより、一つの口頭能力測定テストのモデルを示すことができた。今後日本語口頭能力測定テストに関する議論が活発になることを期待する。

本科研プロジェクトメンバーの次の目標は、多くの人たちと日本語口頭能力測定テストに関する議論を続けながら、JOPT の開発を続け、普及させていくことである。この活動を続けることにより、今後も日本語教育の分野、特に日本語口頭能力に関する分野の発展に貢献したいと考

えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伊東祐郎、嶋田和子、赤木彌生、六川雅彦、鎌田修、由井紀久子	4. 巻
2. 論文標題 会話能力測定法におけるタスク開発 複言語・複文化社会を背景にしたビジネス日本語	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集	6. 最初と最後の頁 (出版予定)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李在鎬、伊東祐郎、鎌田修、嶋田和子、坂本正、六川雅彦、由井紀久子	4. 巻
2. 論文標題 口頭能力と自己評価の関連性について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第23回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集	6. 最初と最後の頁 310-317
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李在鎬、伊東祐郎、鎌田修、坂本正、嶋田和子、西川寛之、野山広、由井紀久子	4. 巻 7
2. 論文標題 日本語口頭能力テスト「JOPT」開発と予備調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語プロフィシェンシー研究	6. 最初と最後の頁 28-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鎌田修、伊東祐郎、嶋田和子、西川寛之、野山広、六川雅彦	4. 巻
2. 論文標題 日本語口頭能力試験"JOPT"の開発と意義：アカデミック、ビジネス、そしてコミュニティー部門における共生に基づく言語使用能力の測定	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集	6. 最初と最後の頁 422-427
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 伊東祐郎、嶋田和子、赤木彌生、六川雅彦、鎌田修、由井紀久子
2. 発表標題 会話能力測定法におけるタスク開発 複言語・複文化社会を背景にしたビジネス日本語
3. 学会等名 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 李在鎬、由井紀久子、鎌田修、嶋田和子、伊東祐郎、坂本正、六川雅彦
2. 発表標題 口頭能力と自己評価の関連性
3. 学会等名 第23回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 李在鎬、嶋田和子、伊東祐郎、鎌田修、坂本正、由井紀久子、赤木彌生、六川雅彦
2. 発表標題 口頭能力評価と言語的特徴の関連 「JOPT コーパス」の分析に基づいて
3. 学会等名 2019年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 李在鎬、嶋田和子、伊東祐郎、鎌田修、坂本正、由井紀久子、六川雅彦
2. 発表標題 口頭能力テスト「JOPT」と「OPI」の対応に関する調査報告
3. 学会等名 2018年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

JOPT運用サイト
https://jopt-team.org/
JOPT (Japanese Oral Proficiency Test)
http://jopt.jp/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鎌田 修 (KAMADA Osamu) (20257760)	南山大学・人文学部・研究員 (33917)	
研究分担者	坂本 正 (SAKAMOTO Tadashi) (60205771)	名古屋外国語大学・世界教養学部・教授 (33925)	
研究分担者	伊東 祐郎 (ITO Sukero) (50242227)	国際教養大学・専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科・教授 (21402)	
研究分担者	李 在鎬 (LEE Jae-Ho) (20450695)	早稲田大学・国際学術院(日本語教育研究科)・教授 (32689)	
研究分担者	由井 紀久子 (YUI Kikuko) (20252554)	京都外国語大学・国際貢献学部・教授 (34302)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	赤木 彌生 (AKAGI Yayoi) (30346580)	東亜大学・人間科学部・客員研究員 (35503)	
研究分担者	野口 裕之 (NOGUCHI Hiroyuki) (60114815)	名古屋大学・教育発達科学研究科・名誉教授 (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関